

OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

大津 歴博 だより

2007
No.66

大津市・志賀町合併一周年記念
ひらさんろくぶんかざい
比良山麓の文化財

平成19年 3月14日(水)～4月15日(日)



大津市指定文化財
木造天部形立像
天満神社蔵(北比良)



大津市歴史博物館

大津市・志賀町合併一周年記念

比良山麓の文化財

大津市と志賀町は、平成一八年三月二〇日に合併しました。これにより、湖西北方にある比良山系の東西山麓が大津市の市域に含まれることになりました。

この地域は、かつては比良三千坊と呼ばれるほど多くの寺院が建立され、わが国の山岳宗教の中心地のひとつとして都でも有名でした。また、北陸へ抜ける北国海道がとおり、湖上交通とともに北方から京都へ向かう交通の要所として重要な地域でもありました。長い歴史の中で、特に戦国時代の戦乱や明治の廃仏毀釈などにより多くの文化財が失われてしまいましたが、今なお伝統的な独自の文化、生活が行われている地域です。

今春に大津市・志賀町の合併一周年を迎え、比良山麓の旧志賀町域を中心に伝来、あるいは関連するさまざまな文化財を紹介します。この地域に伝わる彫刻・絵画・工芸・古文書・民俗の各分野から厳選し、公開するとともに、祭祀、史跡についても写真パネルで紹介、旧志賀町の歩んできた歴史と文化の全体像に迫ります。

なお、今まで旧志賀町では町の指定文化財がありませんでしたが、この二月に新たに大津市指定

文化財として指定された文化財のお披露目も同時に行います。

主な展示品一覧（写真紹介以外）

石神古墳群一号墳出土土器
猿面硯
大津市保管

●小野毛人墓誌

木造獅子・狛犬
大津市保管

比良庄絵図
個人蔵

仏涅槃図
上品寺蔵

仏涅槃図
明王院蔵

□大般若経・経箱・経帙
樹下神社

熊沢蕃山書状
個人蔵

太鼓念仏鉦・太鼓
大念仏講蔵

*太鼓念仏は滋賀県選択無形民俗文化財

△樹下神社金銅装神輿扁額
木戸共有者会蔵

△樹下神社神輿関連文書
木戸共有者会蔵

●国宝、◎重要文化財、□滋賀県指定文化財、
△大津市指定文化財

関連講座 時間は全て午後一時半から三時まで
三月一七日(土) 比良山麓の古文書を読む

中森 洋 (歴史博物館文化財保護課長)

三月二四日(土) 近江国「比良宮」と天神信仰

竹居明男 (同志社大学文学部教授)

四月一四日(土) 比良山の「やま」の祭り

小栗栖健治 (兵庫県立歴史博物館館長補佐)



墨書土器「靈山」 大教寺野遺跡 (栗原) 大津市保管



皇朝十二銭 中畑田遺跡 (和邇高城・和邇中) 奈良時代 大津市保管



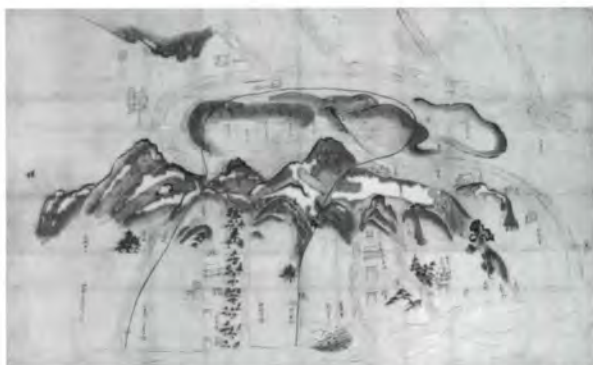
木造獅子・狛犬 鎌倉時代
天皇神社境内樹下神社蔵（和邇中浜自治会）



木造菩薩立像
鎌倉時代 上品寺蔵（小野）



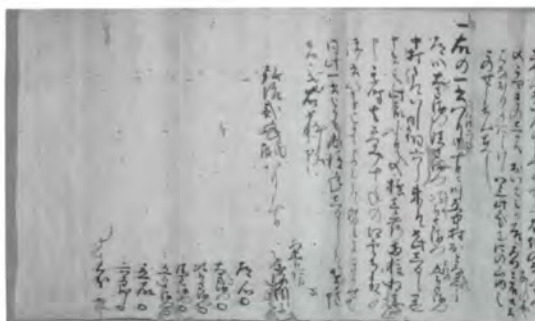
重要文化財 木造阿彌陀如来立像
鎌倉時代 西岸寺蔵（和邇中）



滋賀県指定文化財 比良庄絵図
室町時代 北比良財産管理会蔵



大津市指定文化財 懸仏 室町時代
水分神社蔵（栗原）



和邇庄安養坊等連署置文（部分）
鎌倉時代 今宿自治会蔵 永仁5年（1297）



比良天満宮縁起（部分） 江戸時代
天満神社蔵（北比良） 元禄4年（1691）

第59回ミニ企画展

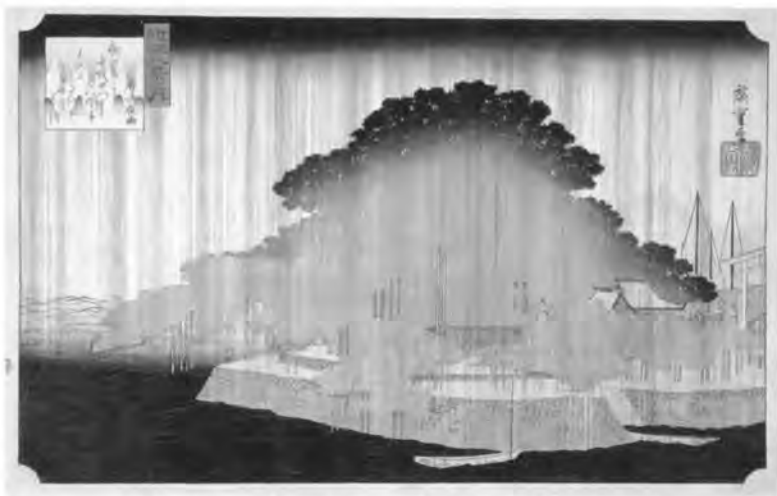
広重と近江八景

■平成19年3月14日(水)～4月22日(日)

フエノロサ夫人によつて「霧と雪と雨の芸術家」

とたとえられたように、歌川広重（一七九七～一八五八）の表現した浮世絵風景版画の世界は、情趣ゆたかな魅力にあふれています。広重は、名所風景画の仕事に才能を開花させ始めた頃から近江八景作品を手がけており、最晩年に至るまで、大小様々な形態を含め（団扇絵や絵封筒、双六絵等も）二八種類以上が確認されています。それらは、版元名を冠して呼び、区別されています。本館には、そのうち代表的な五種類が所蔵されています。中でも傑作とされる「保永堂・栄久堂板」、通称「横板八景」は、雨中の静寂と存在感をみせる老松の唐崎夜雨をはじめ、近江八景をそれまでにない印象的な情景として描いています。また、才能が開花する直前の、天保初期（一八三三頃）の「丸清板」は、シルエット効果やモチーフを引き寄せる構図など、広重らしい表現の萌芽をみせる作品です。その他、数十年ぶりに美人画作品を手がけ、近江八景に見立てた「藤慶板」、ゴッホが模写し

たことで知られる「江戸名所百景」の兄弟作品ともいえる「魚栄板」、パースアイの視点から見下ろしたパノラマ風景画の「近江八景寄縮一覽」以上を展示し、様々な名所風景表現を展開した多彩な広重の近江八景の世界を紹介します。



歌川広重 栄久堂版近江八景之内 唐崎夜雨 本館蔵

第60回ミニ企画展

館蔵大津絵展

■平成19年4月24日(火)～5月27日(日)

人の世の教訓を説く一方で、生真面目になりすぎず、ユーモラスにあふれた描きぶりで多くのファンを持つ大津絵。その屈託のない、自由奔放な筆遣いからは、江戸時代の人々の気質が素のままに伝わってきます。

本展では、初期大津絵の神仏物から中期の世俗物、そして後期の道歌入り大津絵は無論、近代日本画家による個性あふれた大津絵作品も含め、収蔵品を一堂に展示。大津絵にあふれる、民画の魅力を振り返ります。

なお、本展は、前半期（5月1～3日）と後半期（5月15日～）の2期展示となり、展示の総入れ替えを行います。



大津絵 提灯と釣鐘

関津遺跡発掘調査の意義

大戸川と瀬田川が合流する地点の南東部、田上関津の地に営まれた関津遺跡は、これまでほとんど発掘調査が行われたことがなく、実態がわからない遺跡であった。今回、本遺跡が立地する地域で、県営ほ場整備及び国道四二二号・市都市計画道路建設事業が行われることになったため、事前に発掘調査を実施することになった。調査はほ場整備と国道部分を滋賀県教育委員会が、都市計画道路部分を大津市教育委員会が担当し、平成一五年から始まり、同一九年までの予定で現在も継続して行われている。これまでに、県内最古級と見られる墨書土器（七世紀中頃）、奈良時代の「田上山作所」に関わりと考えられる建物群、さらに平安時代後期から鎌倉時代の大規模な集落跡、そして室町時代から江戸時代の「関津浜」の一部と見られる護岸施設など、古代から近世にいたる各時期の遺構や遺物が出土し、それまでほとんど分かっていなかった当地の歴史の解明に大きく寄与することになった。加えて、昨年に、遺跡のほぼ中央を南北に貫く大規模な古代の道路跡が発見され、新聞紙上で大々的に報道されたことで、全国的に大きな反響を呼び、いま湖国で注目される遺跡の一つになっている。

この古代の道路跡は両側に溝（幅一〜三m）を備えた路面幅一五m前後の立派なもので、大津市域で初めて発見された本格的な道路遺構である。

道路の使用期間は、側溝やその周辺から出土した土器などにより、八世紀中頃〜九世紀中頃の期間は道として機能していたことが分かっている。（敷設時期については八世紀前半まで遡る可能性がある。この期間は、大津を含む近江国が大きく変化した時代であった。聖武天皇の東国行幸（七四〇年）に始まり、藤原仲麻呂の台頭に伴う保良宮造営（七五九年）や石山寺大改築（七六一年）、そして「藤原仲麻呂の乱」（七六四年）、最後に桓武天皇の平安京遷都（七九四年）に伴う「大津」

の地位の変化など、奈良時代後半〜平安時代初期の期間、大きな歴史の変化が近江を舞台に繰り広げられていた。しかも、それが大津市南部を含む湖南地域に集中している。この事実の本遺跡で見つかった大規模な道路遺構とまったく無関係とはいえないだろう。おそらく、国家的な大事業にあわせて、この道路も造られたと考えるのが妥当だと思われる。使用開始が八世紀中頃という時期を考えれば、聖武天皇の東国行幸が保良宮造営のいずれかが有力となってくる。これを決めることはなかなか難しいが、犬上郡甲良町尼子西遺跡から見つかった古代の東山道と考えられている道路跡が奈良時代中頃に造られたこと、奈良時代の

東山道が城陽市付近から宇治田原を通り大津市南部に至る「田原道」が有力とされていることなどから、天皇の長期の行幸に先立ち、関津遺跡の道路遺構を初めとする近江の東山道が整備された可能性を考えて見たい。聖武天皇が近江禾津頓宮から山城玉井頓宮に至るルートは分かっているが、近江国府から宇治田原へ抜ける「田原道」、すなわち当時の東山道を使って山城へ入ったと考えて何ら差し支えない。その時に通ったのが関津遺跡で見つかった道路とみてよいのではないが、いずれにしても、古代の道路跡の発見により、本遺跡の重要性がさらに高まったといえるだろう。

（本館館長 松浦俊和）



見つかった道路跡（南から瀬田丘陵を望む）
写真：滋賀県教育委員会提供

収蔵品紹介

52

同範瓦とは同じ瓦当範から製作された瓦を呼びます。兄弟瓦です。わが国古代の瓦当範はほとんどが木製であったと考えられています。木製瓦当範は、使用されるに伴い磨滅したり、傷が付いたりします。この範の磨滅や傷が、瓦当製作時に瓦本体に反転した形で付きます。この瓦に付いた磨滅や傷跡の進行状況から、瓦の製作時期の前後関係を読み取ることができません。

ここに紹介します複製八弁蓮華文軒丸瓦は、故西田弘氏から当館に寄贈されたものです。西田氏の報告によりますと、この軒丸瓦は現JR東海道線以北の相模川沿いの地で採集されたものとのことです。昭和二〇年七月、旧天津紡績工場（戦時中は山添完條という軍需工場であったそうです）敷地内の工場運動場の東南隅で防空壕を掘っていた時に、地表下約三尺（約九〇センチ）のところよりこの軒丸瓦が出土しました。伴出遺物として平瓦や須恵器の破片等があったようですが、終戦混乱時に散逸してしまいました。

軒丸瓦は直径約一七センチで、直径五・六センチの中房に一十五の蓮子を配します。花弁は比較的短く約二・二センチを測ります。また、外区には比較的大きめな珠文が巡りまわっています。この軒丸瓦は奈良県の平城宮跡で出土している「六二三五B」型式の軒丸瓦と同範瓦

大津市相模町出土複製八弁蓮華文軒丸瓦

本館蔵

です。

この「六二三五B」型式の軒丸瓦と同範瓦は、大津市内では相模町の他に、石山国分遺跡や膳所城下町遺跡でも出土しています。特に石山国分遺跡第四次調査では五点出土しています。「六二三五B」型式の軒丸瓦は、平城宮跡出土軒瓦の編年研究において第IV期（天平宝字元年〜神護景雲年間）（七五七〜七七〇）前半に位置づけられています。この年代観や平城宮使用瓦との同範関係などから、石山国分遺跡第四次調査で検出された東西南北に整然と配置された溝や建物群は奈良宮関連の遺構と考えられています。さらに、膳所城下町遺跡で検出された2棟の掘立柱建物や防御的な性格を持つ区画溝についても、この軒丸瓦の出土から奈良宮に関連する遺構ではないかと推定されています。

「六二三五B」型式と同範の軒丸瓦は、大津市以外では、先に述べた奈良県平城宮跡の他、当麻寺や三重県松阪市の御麻生園庵寺でも出土しています。特に御麻生園庵寺出土例は、石山国分遺跡出土例や相模町出土例に比べて範の磨滅が進行し、製作技法や使われた粘土が異なっています。このことから石山国分遺跡・相模町出土例とは異なった工房で「六二三五B」型式の瓦当範が再利用され、御麻生園庵寺の軒丸瓦が製作されたと考えられます。

す。しかしながら、なぜ大津から松阪に瓦範が移され、使用されたかは謎につつまれたままです。

このようにいろいろな情報を語りかけてくる複製八弁蓮華文軒丸瓦は、奈良時代の大津の姿を解明する上で、重要なカギであるといえます。（本館学芸員 青山 均）



表面



裏面墨書銘

大津歴博だより No.66

平成19年3月1日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100

ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>